

2011年11月12日発行

日本比較文化学会中部支部

中部支部設立総会報告

2011年3月19日(土)、多文化共生センターにおいて中部支部設立総会が開催されました。日本比較文化学会の中部(または東海)支部を設立に至った経緯についての概略を以下に記します。

岡本 武昭(浜松学院大学)

中部支部の設立準備は太田先生の日本比較文化学会への深い思い入れと若手研究者の研究発表の場の提供という理念に基づいて始まった。

端緒は、数年前(平成20年頃)に所用で浜松に来られた太田先生にお会いした時に、日本比較文化学会への入会を強く勧められたことに始まる。入会については、定年も真近で、私の専攻も経営学で分野も異なり、多少迷ったが、太田先生の熱心な勧誘もあり入会することになった。

それから間もなく、太田先生から関東地区と関西地区の間に支部があれば、大学の、特に若手の研究者の研究発表・交流の場となる、という話になった。そこで私の身近にいて、比較文化に関心がありそうな若手研究者に話をしたところ、関心を持つひとがそれなりにいることが分かったので、それから何度か太田先生を交えて、若手研究者との懇談の機会を持った。その後、計画を具体化していくために、平成21年後半に、まず、平成22年の春に研究会を浜松で開催してはという具体的な提案が太田先生からあった。早速メンバーにこのことを伝えたと、賛成していただけた。準備に取り掛かった。

平成22年5月15日、山内会長のご出席のもと、浜松市にある「研究交流センター」会議室で(仮称)中部地区研究会を開催にこぎつけることができた。

この研究会終了後、太田先生を囲み、懇親会を開き、中部支部設立の可能性について小幡(名古屋)、澤田、津村、川口、高橋、鈴木、渡部、岡本(以上静岡)の9名で懇談会を持った。更に話を深めるために、翌月の6月22日に中部・東海支部設立に向けて懇談の場をもった。出席者は名古屋の小幡先生を除いた8名である。そこでのテーマは太田先生から日本比較文化学会の現況、目的、会則等の説明の後、議論し、理解を深めた。

設立準備に向けて10月(太田先生出席)に設立準備会に向けて本格的な活動を開始。議題は、1)支部設立の要件、準備要件、日程(準備会、総会開催日程)、入会予定会員(一般会員、支部会員)の現況、その他が話し合われた。この後も11月、12月と連続して準備会を開催して計画案を具体化していった。この2回の会合では、1)会員募集の状況、2)支部会則、3)支部役員、4)事務局設置場所、5)その他を検討した。

12月の準備会では、今後の予定として、1)本年12月中に支部設立の進捗状況を太田先生に報告、2)平成23年1月中旬に山内会長に準備状況を報告、3)平成23年6月の総会承認に向けて準備、4)次回日程等を検討。

平成23年に入り、太田先生を通じて山内会長から中部支部の位置づけについて、中部支部の状況からみると、より緩やかなオブザーバー的支部との助言をいただき、この提案お受けした。

平成23年3月19日、中部支部設立総会開催。山内会長、長谷部事務局長出席。

日本比較文化学会中部支部設立に当たって

太田敬雄（国際比較文化研究所長）

すべての始まりは1979年1月。まだ50代だった芳賀馨先生のお宅に弘前大学と弘前学院大学の教員六名が集まって学会設立を語り合った。そこに集まったのは全員英語・英米文学の研究者であったが、当初から学際的な学会として設立する事が検討されていた。それから半年後に弘前学院大学で日本比較文化学会の前身である「東北比較文化学会」の設立総会が開催された。参集した会員は英語、教育学、歴史学、国文学、経済学など多岐にわたり、発足当初から学際的な学会としてスタートした。そのわずか3年後、1982年6月に開催された4回目の大会で関東支部の設立を受けて日本比較文化学会（Japan Association of Cross-Cultural Comparative Culture）と改称。

1984年には『比較文化研究』の第1号が出版され、第6回大会が東北以外の地で初めて群馬の新島学園女子短期大学で開催された。やがて関西支部も設立され、1987年には初めて関西の同志社大学で大会が開催された。

こうして、その後数年の内に九州支部、中国・四国支部が次々と設立されていった。その頃から芳賀先生は、折に触れて中部支部と北海道支部の設立を夢見られるようになっていた。30名強でスタートした学会は順調に会員も増え、10倍以上の研究者を擁する学会となったが、この夢の実現は何度か取りざたされながら実現には至らなかった。（なお、1998年頃までの日本比較文化学会の動きについては同年に発行された芳賀馨編『比較文化学論纂』（開文社出版）に詳しい。）

念願であった二つの支部の設立はついに芳賀先生の御存命中には実現されなかった。私にとって、それは芳賀先生から託された仕事として残った。その宿題がかなえられ、中部支部の設立の動きが本格化してきた中で、私は何度となく芳賀先生の夢の実現に感動を覚えていた。すでに確立されている学会に新しい支部を立ち上げるには大きなエネルギーを必要とする。岡本武昭先生を中心に浜松・静岡の皆さんが力を合わせて中部支部の設立にご尽力いただいた事に、改めて感謝したい。

日本比較文化学会は、発足当初から会員の研究発表の場として、また多分野の研究者の交流の場として発展してきた。「学会に出るなら発表しなさい！」という芳賀先生の口癖を思い出す。この言葉に背中を押されて会員は競って発表してきた。中部支部においても会員が発表の場として積極的に活用されることを願っている。会員の背中を押す支部として長く活躍してほしい。

第1回研究発表会報告

2011年3月19日（土）、多文化共生センターにおいて第1回研究発表会（例会）が開催されました。二報告の要旨を掲載いたします。

比較文化の視点からみる *Star Trek*

川口 雅也（浜松学院大学）

『スター・トレック』（1966 - ）は、繰り返される再放送も含め、現在に至るまでの45年間に、米国だけでなく、西洋諸国、および、日本を含むアジア各国で、6つのテレビ・シリーズと11本の映画が、放送・上映されてきた。それらの作品に一貫して流れる主題は、原作者 Gene Roddenberry（ジーン・ロデンベリ、1921-91）による“infinite diversity in infinite combinations”（「無限の組み合わせが生む無限の多様性」）という世界観である。日本でも、最近になってようやく、多文化共生という社会の在り方が求められるようになってきたが、彼は、最初の放送の1960年代から、それを提唱してい

た。

この講演においては、彼の世界観が最も完成された形で描かれていたと考えられる 2 作目のテレビ・シリーズ *Star Trek: The Next Generation* (『スター・トレック―次の世代―』、1987 - 94) を題材に、そこで描かれる、次にあげる項目を具体例として挙げながら、現代社会の在り方と関連づけて、「無限の多様性」が意味することについて考えてみた。

- ①「名・姓」の文化圏において、「姓・名」という他文化を尊重すること。
- ②外見を偏見につなげないこと。
- ③内政干渉と個人のアイデンティティ
- ④同化政策という負の歴史と向き合い、他文化を尊重する未来を選択すること。
- ⑤多様性の中にある普遍性を見ようとする事。

こうした『スター・トレック』の世界観を、私たちの比較文化の視点、つまり、日本民族と、他の民族の文化の比較という点から見てみると、どんな問題点が浮かび上がってくるのか。①については、英語圏において、日本民族は、ほとんどの人たちが姓名の語順を変えてしまっているが、それはどんな意味をもつのか。②は当然のことだが、困難なことでもある。それを避けられれば、どんな可能性が開かれるのか。③に関しては、文化というとき、私たちは個人を忘れてしまっていないだろうかという疑問が生じる。④については、どうなのか。日本民族は、先住民族であるアイヌ民族、沖縄民族の文化を尊重していると言えるのかどうか。⑤はどうか。多文化共生という、それぞれの文化の違いにばかり目が行き、普遍性を見ようとする姿勢が欠けているのではないか。こうしたことをエピソードの内容を踏まえながら指摘した。

米国のテレビ・シリーズの考察という、日常から逃避した絵空事を楽しんでいるだけのように思われる方もいるかもしれない。しかし、そこに比較文化の視点が入るとき、『スター・トレック』というドラマは、私たちの日常における「多様性」の尊重を促し、多文化共生の在り方を再考すべく、問題点を突きつけてくるということを、本講演において問題提起した。

平成 21 年度 文部科学省委託事業

「総合的な放課後対策推進のための調査研究事業」から

津村公博（浜松学院大学）

I 調査研究について

平成 20 年の経済不況により、南米日系人の子どもを取り巻く教育環境は大きく変化に伴い、文部科学省は、浜松学院大学等に委託し不就学の状態にある子どもを対象として学びの場と機会を構築し、彼らの学習意欲について調査を実施¹した。調査対象の子どもの中には授業中に問いかけや指示にほとんど反応を見せないなど問題行動が内向きに表れる子どもや攻撃性などの外向きに問題行動が表れる子どもなどが確認できた。

II 不就学の子どもへの支援モデルの構築- 日本の社会で生きる力を育む

南米日系人の子どもは、二言語が併用する社会で生活を強いられることで自らのストレスを制御する力や他者と社会的関係を作る力が弱くなり、学ぶことの意味を見いだすことが難しいと言われている。特に、青少年期という人格形成期に社会文化的な環境の急激な変化にさらされた場合、彼らの自己概念の形成に大きな影響を与えることになる。肯定的な自己概念を築くことができない場合、自分に価値を見出せなければ学習意欲もわからないため学習成果を出すことは難しい。そのため、不就学に陥った外国人の子どもへの支援は、

¹平成 21 年度 「総合的な放課後対策推進のための調査研究」

単なる日本語指導ではなく、外国人の子ども一人ひとりの生活や心身の状況を把握し、柔軟で多面的な教育課程を編成する必要がある。

Ⅲ 今後の調査研究について

出稼ぎで来日する南米日系人は、国際移動を繰り返すことで家族が分散するのと同時に家族の中での役割が変化し、安定した家族関係が揺らいでいく。母国では父親は主たる稼ぎ手であり、母親は家事に専念することによって補完的な分業が成立し、家族は安定していた。しかし、来日して母親も父親と同様に重要な稼ぎ手の一人となることで、互いに経済的に代替関係になり、家族内での地位が平等化される。さらに、経済不況以降生活給としての男性賃金の弱体化・崩壊に伴い、母親が経済的に独立する形での離婚も増えていると言う。南米日系人の家族は、言葉や文化の違いから地域住民との関係性を築くことが困難な傾向にあるため、地域住民が南米日系人の家族の中に何が起きているのか理解することは非常に難しい。そのため、不就学に陥った子どもの支援を行う際には家庭環境の調査が必要となっていくであろう。家庭環境要因（保護者の学歴、教育観、教育期待、家族の機能、家族間の相互依存関係、他の家族メンバーの文化変容など）も含めた、社会文化的適応と言語発達に関する実証的な研究が必要である。

中部支部研究会シンポジウム報告

2011年6月4日（土）、浜松学院大学において中部支部研究会シンポジウムが開催されました。報告の要旨を掲載いたします。

澤田敬人（静岡県立大学国際関係学部）

去る平成23年6月4日（土曜日）の午前中に浜松学院大学を会場として中部支部研究会シンポジウムを開催した。テーマ「多文化主義と多文化共生」のもと発表者が多文化主義の海外（オーストラリア）における事例を紹介し、浜松の多文化共生に関わる知識・情報を有する聴衆との意見交換を通じて、多文化主義と多文化共生の理論と実践の調整ができる場を作った。研究会の運営については、岡本中部支部長、津村中部支部幹事、さらには浜松学院大学スタッフのかたがたのご尽力により、円滑でアット・ホームな参加者の交流が実現した。この場を借りて関係各位に感謝申し上げたい。

発表者は、澤田会員（中部支部副支部長）と静岡県立大学国際関係学部の学生11名であった。両者は、平成22年度文部科学省大学教育推進プログラム（GP）に採択された静岡県立大学国際関係学部の「フィールドワーク型初年次教育モデルの構築」と題するプロジェクトの関係者として、平成22年度内にオーストラリアへフィールドワークに出かけた。今回の研究会シンポジウムでの発表は、その成果の公表を目的としている。成果は、オーストラリアのフィールドワークに引率した大学教員の観点と、実際にフィールドワークを行った学生の観定の両面がある。そこで、岡本支部長の開会・閉会の辞を含め、約1時間半に及んだシンポジウムの開催時間のうち、15分ほどを澤田会員による文部科学省大学教育推進プログラムの目的と実施の詳細についての説明にあて、残りの時間をフィールドワークに出かけた学生の成果発表とその質疑応答にあてた。

澤田会員による「フィールドワーク型初年次教育モデルの構築」によると、プログラム採択大学の静岡県立大学がある静岡市駿河区谷田に位置する静岡県の行政機関（静岡県立美術館、静岡県立中央図書館、静岡県埋蔵文化財センター、静岡舞台芸術センター等）が集合し、ムセイオンプロジェクトとして、文化、芸術、教育の領域で協働している。そのプロジェクトと連動させながら、静岡県立大学の文部科学省GPプログラムを遂行している。プログラムでは、国際関係学部の1年生75名（希望者のみ。全1年生の人数は約200名。）が、アメリカ、オーストラリア、ケニア、スペイン、ベトナム、日本の6つの初年次ゼミに分かれて、海外のフィールドワークを行った（日本ゼミは国内フィールドワーク）。この活動を通じて、学生は、確かな海外調査能力、コミュニケーション能力に基づく地球

市民リーダーとしての自覚を高めることが期待されている。

中部支部研究会シンポジウムでは、6つの初年次ゼミのうち、オーストラリアゼミの成果発表を行った。フィールドワークの目的、渡航前の準備、旅程、調査内容、調査結果の考察、成果発表までの経過について、パワーポイントを使って説明した。ブルーマウンテンズの観光開発、シドニー中心部に住む先住民と都市開発、シドニーオペラハウスの象徴的意味、シドニー・ゲイ・レズビアン・マルディグラによるセクシャルマイノリティの異議申し立て等が、フィールドワークのテーマとして紹介された。発表終了後には、聴衆からの質問を受け、発表者からも活発な発言が続いた。盛会であったシンポジウムを閉会した後、浜松市街に場所を移し、ブラジル料理のセルヴィツォで昼食会を催した。

中部支部役員一覧

岡本武昭、澤田敬人、津村公博、川口雅也、藤田崇夫、渡部いづみ、金子文彦、白鳥絢也、太田敬雄、荒井美幸、杉本貴代、光安アパレシダ光江、加瀬谷恵

第2回中部支部研究発表会 発表者募集のご案内

以下の日程で支部研究会を開催いたします。

日時：2月18日（土） 14：00～17：00

場所：（予定）浜松市多文化共生センター

発表を希望される方は、日本比較文化学会のホームページに掲載の「研究発表申込書」に必要事項を漏れなく記入し、平成23年12月19日（月）までに支部渡部いづみ先生まで宛てた電子メール（ファイルを添付）または郵送でお送りください。

「研究発表申込書」の送付用メールアドレス watanabe-I@hgu.ac.jp

「研究発表申込書」の郵送宛先 〒432-8012 浜松市中区布橋3-2-3 浜松学院大学現代コミュニケーション学部 渡部いづみ研究室気付 日本比較文化学会中部支部
電話 053-450-7000

締め切りは、平成23年12月19日（月）（厳守）です。

多数の報告者の方々のご応募をお待ちしております。

支部会・支部総会 開催のご案内

2011年10月22日付役員会にてお伝え致しましたように、12月中に支部会を実施、その後忘年会を開催いたします。

日時及び会場：未定（後日事務局から日程調整後改めて連絡）

なお、支部総会に関しましては、3月中に開催を予定しております。

『中部支部ニュース』第1号
日本比較文化学会中部支部